

1 年生 「すきなやさい・くだものなめに（野菜と果物）」

1. 授業の実践記録

(1) 英語を用いて主体的にコミュニケーション活動に取り組むための工夫（仮説 1）

【学ぶ楽しさを味わうための小道具を使った工夫】

児童が楽しく英語に慣れ親しむことができるよう、ジェニファー先生のお面を着けて先生の好きな野菜を答えた。発話することに自信のない児童も、お面が回ってくると自然に笑顔になり先生の好きな野菜を答えていた。



(2) 相手のことを考えて、自分の思いや考えを豊かに表現するための工夫（仮説 2）

【学習形態の工夫】

ALT と教員とのデモンストレーションを行ってから、フルーツバスケットのゲームを行うなどの全体での活動形態の流れを設定した。ゲームのルールがきちんと理解できていたので、言いたい英語が分からない児童には小さな声で助けるなど、児童同士でコミュニケーションを取りながら楽しくゲームを行っていた。



(3) 英語に慣れ親しみ、学ぶ楽しさを実現するための工夫（仮説 3）

【インプットの工夫】

野菜や果物の絵カードを使って、部分見せ、瞬間見せ、3 ヒントクイズなど、絵カードの見せ方を工夫して、野菜や果物の英語に十分に慣れ親しむ時間をもった。



2. 指導の結果と考察 ○成果 ●課題

(1) 英語を用いて主体的にコミュニケーション活動に取り組むための工夫（仮説 1）

- ジェニファー先生になって好きな果物をいうときに、待っている友達が「グッド」とリズムに合わせて言っていた。楽しい雰囲気ができて、発話する児童も待っている児童も参加していた。
- ジェニファー先生の好きな野菜を想像して、一人一人が練習はしていた。しかし、実際にジェニファー先生の好きなトマトについては、児童一人一人が発話していなかったのではないか。ジェ

ニファー先生が英語で「トマトが好き」といったときに、児童の反応があまりなかった。児童本人の好きな野菜をきいて、クラスのランキングを作る活動の方がより主体的に取り組めたのではないかな。

(2) 相手のことを考えて、自分の思いや考えを豊かに表現するための工夫（仮説2）

○果物の名前をよく聞き、全員が楽しくゲームに参加していた。言い方を教えてあげたり、自分の知っている英語を使ったりなど、相手のことを考えて、自分の思いや考えを豊かに表現する姿が見られた。

●自分の知っている果物の名前ばかり答えるなど、答え方が同じになる児童もいた。

(3) 英語に慣れ親しみ、学ぶ楽しさを実現するための工夫（仮説3）

○ジェスチャーと英語を組み合わせて話したことで、児童は不安なく、「わかる」という気持ちをもって、よく反応していた。日本語と違う発音をする単語や似ているけど違う単語は、立ち止まって確認したり、正しい発音を聞かせたりすることで、児童が意識しながら発話し、自然に身に付いていた。「日本語でもいいですよ」と言ったり、児童の言葉を補ったり、児童の発話を繰り返したり、児童と視線を合わせて笑顔で接したりすることで、英語に抵抗がある児童もいる中、安心感をもたせることができた。

●授業でやったことから、さらに興味や関心をかき立てることがあまりできなかった。（給食の時間やその他の教科の時間など）